

内容紹介

震災と原発事故で生徒たちは散りぢりになった。日常を失った学校は機能せず、生徒たちが自ら安否サイトを作り、連絡を取り合った。不条理な状況に投げ込まれた生徒たちの希望をどうつなぎ、学びへの意欲を消さないようにできるのか、教師たちも知恵を絞った。あの3・11から2年、震災を乗り越えて大きく育った生徒たちと教師の姿を追う。

初出

朝日新聞 二〇一三年三月六日～三月二十五日

目 次

- [第1章 安否サイトつくろう](#)
- [第2章 物資や給油の情報も](#)
- [第3章 先生ものぞいた](#)
- [第4章 アドレス伝えてくれ](#)
- [第5章 線量計「10万!」](#)
- [第6章 お父さんを学校に](#)
- [第7章 処分を受けてもいい](#)
- [第8章 現実から離れ東大へ](#)
- [第9章 やっと勉強できる](#)
- [第10章 皆さんは希望だ](#)
- [第11章 サテライト開かれず](#)
- [第12章 一緒に食べないか](#)
- [第13章 保護者が学校に殺到](#)
- [第14章 バケツで米作り](#)
- [第15章 1クラスに6.3人](#)
- [第16章 支援者の宿がない](#)
- [第17章 怖い顔、だめだよ](#)
- [第18章 ひょっとしたら東大](#)
- [第19章 色紙に感謝の言葉](#)
- [第20章 SHU・HA・RI](#)

第1章 安否サイトつくろう

福島県立相馬高校は、第一原発から40キロ余り北にある。2011年3月の原発事故で、生徒も教師も避難して散りぢりになってしまった。

生徒はどこにいるのか。1年6組の担任、松村茂郎（まつむらしげお）（52）は生徒の居どころをつかもうと懸命だった。

松村自身が被災者だ。家は浪江町の中心部にある。震災の翌日、町内の赤字木地区に逃げ、そこからさらに郡山市に移った。

学校に電話してもつながらない。学校からは「自宅待機してください」との全員メールがきただけだ。

そんなとき教師仲間の一人から、「生徒が自力で安否確認サイトを立ち上げているらしい」と教わった。

探すサイトはすぐ見つかった。

「1年○組○○ 相馬の避難所にいるよ。元気だよ。みんながんばろうね」

「2年×組×× 父は仕事で残り、母と新潟に避難します」

生徒の多くの安否が、細かく書き込まれている。

「原発事故ゆるせない!」「メルトダウン起きたのかな」。生徒同士で意見や情報の交換もしていた。すごいぞ、これは。学校当局よりはるかに進んでいる。

サイトを立ち上げたのは、2年生の原田泰世（はらだやすよ）だった。

原田の家は南相馬市原町区だ。3月14日の3号機の大爆発で、母や妹とともに岩手県一関市に逃れた。

携帯では、同級生となかなか連絡が取れなかった。友だちはどうしているだろうか。学校がどうなっているかも分からない。県外に出てしまったことが心細かった。

そんなとき妹の純加（すみか）が「安否サイトを立ち上げればいい」といった。

純加は県立原町高校の1年生。原町高校の生徒たちは、すでに安否サイトを立ち上げており、早い段階で友だちと連絡が取れていた。

「学校に相談せず、勝手にそんなことやっていいだろうか」

泰世はちょっと迷ったが、「みんな連絡が取れなくて困っているはずだ」と決断した。

パソコンに強い純加が画面の記入フォームをつくってくれた。

学年ごとにページを分ける。

名前、クラス、出席番号の欄と、自分の居場所やひとことが書き込める自由記入欄をつくった。

震災から1週間が過ぎようとしていた。

第2章 物資や給油の情報も

原田泰世・純加姉妹が設けた安否確認サイトには、次々に書き込みが加わった。

メールで連絡してきた友だちには「できるだけ多くの人にサイトのことを知らせて」と流した。

書き込まれた情報のうち、物資調達と給油は別ページにした。

「南相馬市原町区のスーパーで、明日〇時から〇時まで、おむつとトイレットペーパーが1人〇個まで買えます」

「被災者は高速道路が無料で通れます」――

祖父は避難せず、南相馬市のガソリンスタンドで働いていた。祖父の情報をもとに、「鹿島区の国道6号沿いのスタンドで、明日〇時から給油できます」などと書き込んだ。

「何か協力したい」と書き込んでくる生徒もいた。純加がメールで連絡を取り合い、途中から生徒の安否を一覧表にした。

相馬市から南相馬市の原町高校に通う生徒、逆に南相馬市に住んで相馬市の相馬高校に通う生徒もいた。このため純加と原町高校のサイト担当者が話し合い、給油情報などを共同で載せることもあった。

泰世はサイトの管理者として、書き込みの内容が正しいかどうか確かめなければならない。関係者に聞いて回り、確認が取れない場合にはそう断って情報を載せた。

家族や同級生が津波で亡くなったという情報が入ることもあった。

4月に入り、相馬高校が中旬から再開するという話が聞こえてくるようになる。

そのころから、批判の書き込みも目立ちはじめた。

「亡くなった生徒の情報を載せるのはかわいそうじゃないか」

「こんなサイト、なんの意味があるの？」……

泰世はパスワードをつくり、不特定多数がアクセスできないようにした。パスワードは「k u r e n a i」。相馬高校の校旗の色、深紅から考えた。

それでも中傷は続いた。

泰世は「いいたいことがあったら私に直接メールして」と、自分の個人アドレスをアップした。それで中傷書き込みはなくなった。

「日が経つにつれ、生徒にストレスがたまってきた。サイトがそのはけ口になったのだと思います」

相馬高校は4月に再開し、サイトはその月末に閉鎖された。「役目を終えたと思いましたから。正直、ほっとしました」

第3章 先生ものぞいた

相馬高校の生徒が独自に立ち上げた「安否確認サイト」に、先生のページはなかった。

開設した原田泰世・純加姉妹は「友だちのことしか頭になかった。まさか先生がサイトのことを知っているとは思わなかった」。

しかし教師にとって、サイトは重要な情報ばかりだった。郡山市に避難している1年6組担任の松村茂郎は、学年主任も兼ねている。毎日、朝起きるとパソコンを開き、サイトをチェックするのが日課だった。

自分や家族の今後の生活以上に、学校や生徒のことが心配だった。

郡山の避難先は妻の実家だ。地震の被害を受けている。その後片付けの合間、一日何回もサイトをのぞいた。そのたびに、新たな生徒が1人、2人と書き込んでいた。

どの生徒がどこにいて、どういう思いで避難生活を送っているか。手に取るように見えてきた。

松村も書き込みをしようと思ったが、「生徒がつくったサイトに教師が加わってはまずい」とやめた。かわりにノートを買ってきた。

担任の1年6組はもちろん、学年のほかのクラスや他の学年の生徒についても記録した。少なくともサイトで知った生徒の居場所はすべて記録しておこうと思った。

「1年6組〇〇（福岡）、××（福島）、△△（自宅）、□□（千葉）……」

だがサイトに書き込んでいない生徒は、依然として所在が分からなかった。

3月19日昼過ぎ、松村の携帯電話に着信があった。受け持ちクラスの男子生徒、吉田蒼（よしだそう）だった。

「先生、学校はどうなるんですか」

松村は答えに詰まった。

吉田の家は相馬市内だ。震災後、伊達市保原町の祖父の家に避難していた。一時は伊達市の高校への転校も考えたが、相馬市の方が放射線量は低いといわれたという。

「もう春休みになってしまう。新学年の教材購入のこともあるんで、どうしたらいいかと思つて」

転校すべきか、戻るべきか。迷ったあげく、松村に直接電話をしてみたのだった。

松村は「実はいま、郡山にいるんだ」と率直に答えた。「ガソリンがなくて、学校にも行けずにいる。とにかく、学校から連絡があるまでは休みと思って過ごしてくれ」

その時点でいえる精いっぱいの内容だった。

第4章 アドレス伝えてくれ

相馬高校教師の松村茂郎は、担任の1年6組全員に、緊急時用に自分の携帯番号を教えていた。3月19日に生徒の吉田蒼が電話してきたのは、その番号あてだった。

吉田と話しながら松村は、ふと思いついたことを口にした。

「おまえ、みんなの携帯のアドレス、どのくらい知ってる？」

震災後しばらく、携帯電話は通じなかった。しかし携帯メールだったらなんとか通じる。いまのうちにつかめるだけつかんでおきたい。

吉田は「けっこう知ってますよ。男子はほとんどです。女子も少し」といった。

松村は「いまからおれの携帯のメールアドレスをいうから、書き取ってくれ。それで、クラスのみんな、できるだけ多くに伝えてくんねえか」と頼んだ。

もうひとつ。「おまえのメールが届いたら、おれにメールで居場所を知らせるよう伝えてくれ」

松村は、生徒と確実につながる方法は、もはやメールしかないと考えていた。

吉田が松村と話をしていると、父が紙にメモを書いて指で示した。「先生のメールアドレスを覚えてもらえ」。父も学校の教師だった。

震災当日、吉田は親と連絡がとれず、遅くまで避難所に残っていた。松村は心配し、吉田を歩いて自宅まで送ってくれた。そのことが心にしみていた。その松村が、父と同じことをいっている。

「いけると思います。やってみます！」

吉田は女子同級生に協力してもらい、35人のクラスのほぼ全員に、松村のアドレスあてに居場所を伝えるようメールした。

吉田が電話を切ってもまもなく、松村にメールが入りはじめた。

その日の夜までに、27人から居場所の連絡が入った。反応の早さはすごかった。

「地震や津波の騒ぎがひとしきり終わって、生徒も精神的に落ち着いてきたためだと思います」

それにしても生徒の情報網はすごい、と松村は感心した。

震災前、県教育委員会は「教員と生徒は私的なメールのやり取りをしないように」と呼びかけていた。不祥事防止が趣旨だ。それには反するが、そんなことをいつていられる状況でないのだ。

松村はすぐ、他の担任にもメールで伝えた。「このやり方、なかなかいいよ」

第5章 線量計「10万！」

3月19日、受け持ちクラスの1年6組の生徒から担任の松村茂郎に届いたメールは生々しかった。

「いま、祖父の火葬が終わりました。葬祭場の玄関前にカラスがとまっていました」

「遺体は緑っぽい色に変色していました。人間って、心臓が止まり、血液が循環されなくなるだけであんなに変わり果てた姿になってしまうんですね」

この時点で、クラスの35人中、自宅にいる生徒は9人だけ。県外に避難した生徒が16人、県内に避難した生徒が10人だった。

「先生、体調はどうですか。浪江は強制退去と聞いています。とても心配です。私は山形の姉のアパートにいます」

「早く6組のみんなに会いたいです。この生活もあと少しだと思って頑張ります」

松村も、メールを送ってきた生徒たちに次々に返信した。

「元気ですか。みんなから次々と連絡が入り、うれしい限りです。私は現在郡山にいます」

「私の家は浪江で原発から近いので、もう帰れないかもしれません。家に戻れないまま避難を続けてきました。でも元気ですよ」

「ガソリンがなくて学校に行けないので、私も学校の様子は電話で聞いているだけです」

「いろいろ不安になっていると思いますが、今自分がやれることを精いっぱいやりながら、またみんなで会える日を楽しみに待っていてください。いつでもメール歓迎です。遠慮なくどうぞ」

自分自身を奮い立たせる意味も込めて書いた。松村は原発の爆発で、放射能を浴びたのだ。

3月11日は、帰宅できない生徒と避難所で過ごした。12日、他の先生と交代し、家族の避難先である浪江町赤宇木の親戚宅に移った。そこで1号機の爆発をテレビで見た。

14日の3号機の爆発もテレビで知った。家族で郡山市の妻の実家に避難した。その前に、市内の体育館でスクリーニング検査を受けた。

防護服を着た担当者が線量計をあてると「10万！」と声を上げた。単位は分からなかったが、周囲の担当者がどよめいた。

この日の午前中、赤宇木で草むら歩きをした。そのときに汚染されたとしか考えられなかった。

衣服を脱いで測りなおすと線量は下がった。安心したが、初めて「放射能」を強く意識した。

第6章 お父さんを学校に

相馬高校教諭の松村茂郎は、自分が放射能を浴びたという認識をしばらく持てなかった。

松村にとって、福島第一原発は「慣れ親しんだ遊び場」だった。

生まれ育った浪江町津島から、小学3年生のとき町中心部に移った。

中学生になると、夏場は友だちと約10キロを自転車に乗ってよく原発を見に行った。

サービスホールの冷水器で水を飲んだ。うまかった。

ホールの中はエアコンが利いており、快適だった。原発の製造過程のビデオ映像を繰り返し眺めた。バスに乗って構内見学もした。

「原発が怖いという気持ちはありませんでしたね。まして爆発するなんて。私たちが浪江町の外に避難することになるなど、思いもよらなかった」

郡山の妻の実家に移った。生徒の居場所は安否確認サイトやメールでほぼ把握できた。とりあえずはひと安心だ。

相馬高校は避難指示がでている地区ではない。しかしガソリン不足で学校に行けないのがもどかしい。

郡山から相馬まで、地震による損壊が少なそうな道を選ぶと、山道を通って片道100キロ近くになる。往復200キロ。通勤するにはあまりにも遠すぎる。

次男が福島大学に進学が決まっていた。そのために契約していた福島市内のアパートの空き部屋に、自分の布団だけを持ち込んだ。福島から相馬までは約50キロだ。これなら何とかなりそうだ。当面はそこから相馬高校に通うことにした。

あとはガソリン確保だった。

妻の真由美（49）が知り合いに片っ端から電話を入れ、どこでいつからガソリンが入れられるか、情報を集めつづけた。

「なんとかお父さんを学校に行かせてあげなきゃと、そればかり考えていました」

出勤できたのは3月28日だった。

相馬高校と道路をはさんではす向かいに、使われていない旧相馬女子高校の校舎がある。そこに南相馬市民が500人近く避難していた。

「旧相馬女子高の避難所で暮らしています」。担任の1年6組の生徒から受信したメールを見ていたため、とりあえず行ってみた。

校舎に入ると、胸に「相馬高校」と手書きした粘着テープを貼り、作業着姿で清掃のボランティア活動をしている男性がいた。事務長の鈴木正裕（すずきまさひろ）（51）だった。

第7章 処分を受けてもいい

2011年3月28日、松村茂郎が旧相馬女子高校で出会った事務長の鈴木正裕は、相馬高校の職場は無断で欠勤し、福島市内の自宅からまっすぐ避難所に向かっていた。

「自分なりの抗議のつもりでした。処分を受けてもいいと考えていました」と鈴木はいう。

作業着姿でバスに乗り、女子高に着くと胸に「相馬高校」と大きく手書きしたテープを貼った。

相馬高校は、震災翌日から生徒の姿が消えた。教職員は自宅待機のため、多くは登校していない。

市内の小学校は避難所として開放されていた。多くの被災者を受け入れ、教職員が支援に当たっている小学校もあった。しかし相馬高校の本校舎では何もしていなかった。

電気は来ていたし、トイレも暖房も使えた。同窓会館には風呂もあった。にもかかわらず。

鈴木は震災後、ほとんど毎日学校に行き、様子を調べた。体育館のガラスは割れている。修復する必要があった。しかし余震が続いており、業者も避難してしまっていてうまく進まない。

学校運営は自分の直接の業務ではない。だが、ほとんどひと気のない学校の姿はくやしかった。

松村のような、被災して避難した教職員は出勤できないのもやむを得ない。しかし、いくら自宅待機といっても、相馬市内に住む教職員までがあまり出てこないのはおかしい、と思った。

「学校が再開するののかもはっきりせず、避難所として開放する地域貢献もしていない。教職員は何といっても公務員なんだから、とりあえず被災者支援をやらないといけなかったと思います」

勝手に避難所でボランティア活動をしたのは、いてもたってもいられなかったからだ。「相馬高校だけがなにも地域貢献をしていない」といううわさも耳にしていた。

鈴木は翌日からは仕事に追われ、ボランティア活動をしたのは1日だけだった。しかし、鈴木の動きに気がついた教師数人が、避難所の配膳などを手伝うようになった。

3月末に運営委員会が開かれ、4月10日過ぎの学校再開がいったん決まった。だが、相馬市内の小中学校が再開していないのに相馬高校が先に再開していいのかなどの意見が出て、白紙になった。

さらに、校長が3月31日で定年退職した。混乱状態の中、相馬高校は新学期を迎えた。

第8章 現実から離れ東大へ

新学期を目にした2011年3月30日、松村茂郎にメールが届いた。

「人づてにご無事だとお聞きしました。原発事故により、不安な日々を送られている生徒さんもおられるのではないかと察しております」

東京大学経済学部教授の松井彰彦（まついあきひこ）（50）からだった。

「何かお力になれることはありますでしょうか。ご返信いただければ、ぜひご相談させていただきたいと思います」

松井と松村の関係は、09年秋にさかのぼる。

当時、相馬高校は文部科学省が進めるスーパーサイエンスハイスクールの指定校だった。松村は生徒の研修受け入れ先として、松井に飛び込みで依頼メールを出していた。松井は興味を持ち、受け入れを決めた。

松村は5人の生徒と東大を訪れた。「個々の合理的判断が、集団にとって最良の結果を生むとは限らない」との仮説を生徒が提起し、経済学について議論した。充実した中身になった。

松井のメールに、松村は「いろいろご相談することになると思います。お力添えを頂ければ幸いです」と返事をした。

メールに続いて、電話でも連絡を取り合った。その結果、4月14日から3日間、相馬高校生を東大での研修に受け入れる計画ができた。

生徒に、震災の現実を一時でも離れる機会を与えよう。学習意欲を保つため、模擬講義などに参加してもらおう――。

生徒全員に参加を呼びかけるのは、もちろん不可能だった。担任の1年6組を中心にメールで募集した。最終的に42人が参加し、貸し切りバスで上京した。

松井のゼミに所属する17人の東大生も研修に参加した。

生徒たちは「将来は薬剤師になりたい」「部活動ができないのがつらい」など、思っていることを率直に話した。「避難区域が広がったら、みんな転校してばらばらになるのが心配」という悩みも語られた。

松井はそれから相馬高校に関心を持ち、たびたび訪れるようになる。12年1月からは、月に一度、松村の授業にゲストとして参加した。震災という「社会的な障害」を乗り越えようとしている相馬高校と、継続して関わり続けようとした。

この経験が、相馬高校を積極的に外部との交流に取り組ませるきっかけとなった。

第9章 やつと勉強できる

相馬高生の研修が始まる前の2011年4月上旬、東大教授の松井彰彦はツイッターで企画内容をつぶやいた。それに気づいたのが、東京の大手予備校講師、藤井健志（ふじいたけし）（43）だった。

藤井は東大卒だ。松井の研究仲間で東大医科学研究所特任教授の上昌広（かみまさひろ）（44）の1年後輩。剣道部仲間だった。

上は医療面で、震災直後から福島での支援活動を続けている。藤井には「これからは復興を担う人材育成が重要。教育支援で何かやれよ」と繰り返していた。

藤井も、予備校講師の立場で何かやれることがないか模索していた。予備校の講師たちにも「何かできることをしませんか」と声をかけた。しかし反応はいま一つだった。

スター講師だなんてもてはやされる人でも、全然動いてくれないじゃないか——。落胆していたときに見たのが松井のツイッターだった。

「受験勉強についてなら話せる」と考えた。上を通して松井に研修参加を申し出た。

予備校講師として、学校教育に介入することにはためらいもあった。参加するにあたって「基本は学校の勉強」という考えを崩さないことにした。

藤井が研修に参加したのは、最終日の4月16日の午前だった。約1時間、現代文の講義をした。

相馬に帰る直前で、自由行動の時間を変更してのスケジュールだったが、生徒は興味津々の表情で、藤井の話を聴き入った。

藤井は、予備校が提供してくれた各教科の問題集を持って、生徒が泊まっている旅館に出向き、「持って帰っていいよ」といった。

そのとき、1人の男子生徒が問題集を手にも、ぼそとつぶやいた言葉が藤井の耳に入った。「ああ、これでやつと受験勉強ができる」。彼らはこれまで、受験勉強どころではなかったのだ。

藤井はその後も、教師の松村茂郎らと連絡を取りながら相馬高校に出向き、受験指導をしている。

予備校慣れた都会の高校生と違い、相馬高生の姿は新鮮だった。

あの男子生徒のつぶやきが、相馬に出向くことの意味を今でも再確認させてくれていると思う。

「見返りを期待しているわけではありません。異なる立場でも、つながりあうと大きなパワーが得られる。それを実感でき、自分自身が勉強になっています」

第10章 皆さんは希望だ

2011年4月、相馬高校に生徒が戻ってきた。

始業式が4月18日にあった。例年は入学式も同じ日だが、1日遅れの19日になった。教師も生徒も不在の期間が長引き、教室の移動や清掃などの時間が取れなかったためだ。異例づくめの新学期だが、校内あちこちで生徒の歓声が響きわたった。

松村茂郎が担任したクラスは2年になった。生徒の吉田蒼はいう。

「メールや電話でも連絡は取り合っていましたが、顔を見て話すことがこんなに楽しいのだということを初めて知りました」

生徒への個人面談は、始業式の前から始まっていた。教師は生徒の精神面のケアにも役立てようと、震災後の避難経路や現在の家族状況などを聞き取り、データ化していった。

震災当時の校長は3月31日で定年退職していた。教頭が校長代行を務めた。

4月20日の1時限目。講堂で、2年生の学年集会が開かれた。220人の新2年生を前に、学年主任の松村があいさつした。

松村は、前の晩に遅くまでかかってつくった原稿を読み上げた。

いつもなら原稿を書くようなことはしない。しかし、あの大地震を乗り越えて学校に戻ってきた生徒たちを前に話を始めたら、涙が出てきて話ができなくなってしまうのではないか。そう思った。

震災いらい、何かと涙が出て困っていた。目につねに涙が浮かんでくるのだ。

講堂に生徒が次々に姿を現した。案の定、松村はそれだけでもうだめだった。涙をふいてから、松村は話し始めた。

「福島県人は、人類が経験したことのない苦しみ状況にある。世界中から注目されているフクシマ人の生き様は、世界中の人たちに希望を与えるものだ」

始業式の日、「学年通信」を学年全員に配っていた。そこに書いた文章だ。それをあいさつでも引用した。松村は続けた。

「皆さんは未来の希望だ。茶髪でも、赤点を取っていても、大事な大事な希望だ」

「私たち教師も生き様が問われる。日本の、世界の希望である皆さんを、本当の宝に育てなければならない。手加減はしない。一緒にがんばろう」

講堂は静まりかえった。松村は語りながら、こらえきれずに涙をぼろぼろ流した。

第11章 サテライト開かれず

相馬高の松村茂郎が担任する6組は「理数科クラス」だ。理科と数学の履修単位が普通科より多く、文系もいるが、理系に重きを置いたカリキュラムになっている。

難関大学を目指す生徒が多く、特進科の位置づけもある。定員は40人で、3年までクラス替えがない。

相馬高校が4月に再開したころ、県立双葉高校2年の蜂須賀康太（はちすかこうた）は、その相馬高校へ転校するかどうかで悩んでいた。

浪江町請戸地区に家があったが、津波で流された。さらに原発事故で地区への自由な立ち入りができなくなった。

双葉高校では陸上部員で、3月11日は学校のグラウンドで練習していた。地震後すぐ、近くの東京電力宿舎に逃げ込んで助かった。

その後に家族と合流でき、翌12日に浪江町津島から川俣町に避難。13日に猪苗代町、その後は新潟県柏崎市へと転々とした。

問題は学校をどうするかだった。双葉高校は第一原発から約3キロの近さで、再開の見込みは立たない。

福島県教育委員会は4月上旬「サテライト方式」を打ち出した。原発事故で避難区域になった高校の生徒をグループで、区域外の受け入れ協力校に通わせるというものだ。

浜通りでは相馬と相馬東、新地の3校が受け入れ校になった。

避難生徒の籍はもとの学校のままだ。受け入れ校の空き教室や施設を使い、もとの学校の教師から学ぶというシステム。被災校が受け入れ校に「間借り」する形だ。

蜂須賀の両親は仕事の関係で栃木県にいた。相馬市内には身寄りがなかったが、浪江町のいところが相馬高校への入学を決めており、アパートを借りることにしていた。そこに同居させてもらい、サテライトで相馬高校に通うつもりだった。

しかしそれがだめになった。

県教委は、学年で10人以上が希望しないとサテライトを開設しないと決めた。学習効果が理由だった。相馬高校の場合、双葉高校からの希望者は各学年とも10人に届かず、サテライトは開設されなかったのだ。

他のサテライト校は福島市やいわき市で、下宿か旅館に泊まり込んで通うしかない。

双葉高校の担任に相談した。「それならいっそのこと、相馬高校に転校して理数科クラスに入ったほうがいい」。成績が優秀な蜂須賀を見込んでのアドバイスだった。蜂須賀は転校を選んだ。

第12章 一緒に食べないか

双葉高校に通えなくなった蜂須賀康太は4月下旬、相馬高校への転校試験を受け、合格した。すでに入学が決まっていたところ、その母親と3人で、相馬市内のアパートで暮らすことになった。

だが、アパートの空き部屋が見つからない。何軒も探してやっと見つけた2Kの部屋は狭く、3人の布団を敷くとぎゅうぎゅうだった。

制服は、息子が相馬高校の卒業生という父の知人から譲ってもらった。たまたまサイズもぴったりで、何とか間に合った。

連休後の5月9日、相馬高校に初めて登校した。松村茂郎の担任する理数科クラスの席に座った。同学年に知り合いはおらず、心細かった。

「それでも、できるだけ笑顔でいようと心がけました。変に同情されたくないし、気を使われるのもいやだったから」

最初の昼食の時間に、横の席の男子が「一緒に弁当食べないか」と誘ってくれた。うれしかった。

転校にあたって、部活動をどうするか決めかねていた。

コンビニか何かでアルバイトをするつもりでいた。その稼ぎを、アパート暮らしで面倒を見てくれているいとこの母親に、生活費の一部として渡すつもりだった。

しかし初登校の日、ほかのクラスの生徒がやってきて「おれ陸上部だけど、放課後に迎えに来るから、一緒にグラウンドに行かないか」といった。

この日配られた学年通信に、転入生の自己紹介文を書いていた。「震災前は双葉高校に通っていて陸上部でした」とあるのを見て、その生徒がわざわざ入部を誘いに来てくれたのだ。うれしくて、そのまま陸上部に入ってしまった。

相馬高校って、いいところかもしれないな。身構えていた気持ちが解け、友だちが1人、2人と増えていった。

双葉高校の陸上部の仲間は、多くがいわき市にあるサテライト受け入れ校の磐城高校に行った。

5月下旬、福島市であった大会で仲間に会った。「元気?」「相馬高校はどう?」と声をかけられ、「たのしいよ」と笑顔で答えた。

久しぶりの再会に話は弾んだが、さびしさもあった。自分のチームジャージーだけが、双葉高校の仲間のものと違うのだ。

「仲間と離ればなれになったことは、まだ若干引きずっているかな」と蜂須賀はいう。

第13章 保護者が学校に殺到

相馬高校にサテライト方式で入った中には、南相馬市の県立相馬農業高校もあった。

校長だった二本松義公（にほんまつよしきみ）（60）は、2011年3月下旬に新聞で見るまで、サテライト計画を知らなかった。記事で自分の学校の名前を見てびっくりした。

4月、県教育委員会が計画を発表すると、いくつもの疑問がわいた。

——サテライトが分散したら、教師をどう配置したらいいのだろう。

——農業高なので実習が必要だが、その場所をどう確保するのか。

——各生徒のサテライト行き先希望をどう調べるのか。

県教委は「間借り先の学校に手伝ってもらおう」という。しかし受け入れ校にそんな余裕などない。ほかの疑問点についてもきちんとした説明はなかった。

4月9日、県教委は相馬・双葉地区の保護者説明会を開いた。相馬高校の講堂が会場になった。

1千人以上の保護者が殺到した。首都圏から参加した保護者もいた。相馬市内が保護者の車で渋滞したほどだった。

満員の講堂で県教委が説明した。

「サテライト期間は、原発の状況によるので何ともいえません」

「サテライトの受け入れ先は県内だけです」——

ホームページの発表内容とさほど変わらない。「転校とサテライトとどちらを選べばいいのか」とか「交通費はどうなるのか」などの質問が出たが、具体的な説明はなかった。

参加者が多く、説明会は午前と午後の2回に分けられた。午後の部では、待たされた保護者から怒声が飛んだ。

「こんなことを聞いても仕方ない」と席を立つ人もいた。

県は頼りにならない。相馬農高の担任は、生徒の一人ひとりに電話をかけ、通学先の希望を聞いた。朝から晩まで携帯をかけ続けた。通話代は私費だった。

結局、相馬農高の受け入れ校は相馬高校だけになった。飯館の分校には約70人の生徒がいたが、その受け入れ先はなかなか決まらず、5月、やっと福島市の県教育センターに落ち着いた。

生徒を放ってはおけない。二本松は3月下旬、教師に自習用の問題集をつくらせ、生徒に送った。

宅配業者が原発30キロ以内に入ってこなかったため、域外の営業所まで教師が車で資料を運んだ。「各校が自分で動かなければ、物事はいつさい進みませんでした」

第14章 バケツで米作り

相馬農高は2011年5月、サテライト方式で相馬高に間借りした。

相馬農高には3科ある。作物栽培や園芸を学ぶ生産環境科。緑地環境整備や農業土木を学ぶ環境緑地科。農産物加工や食品衛生を学ぶ食品科学科。農地や調理場での実習が欠かせない。

相馬高にはその場所がなかった。

新地町のトマト栽培農家の休耕地を借りて実習した。調理は、相馬市内の菓子店の調理場の一角を使わせてもらった。

旧相馬女子高の庭でバケツに土を入れ、イネや野菜、花を育てた。

津波で海水の混じった土と植え比べ、塩害についても学ばせた。

校長の二本松義公（にほんまつよしきみ）は県教委を通じ、文部科学省に単位認定を念押しした。「実習はこれし
かできません。あとになって、それではだめだといわれても困ります」

教室も不自由だった。

旧相馬女子高の体育館が教室になった。ボードで仕切りをし、机を並べて教室にした。

体育館は声が反響する。声の大きい教師が授業をすると、ほかの教師の声が聞き取れなかった。仕切りで光がうまく入らず、薄暗かった。

サテライトは半年間も続いた。その間、生徒はほとんど不満をいわなかった。

相馬農高では震災で4人の生徒が亡くなっている。二本松はいう。

「亡くなった生徒の分までがんばろう。生徒はそう思ってくれたのではないだろうか」

震災直後の3月中旬、相馬農高の体育館も遺体安置所になった。亡くなった生徒が運ばれたと聞き、二本松は体育館に走った。

生産環境科2年の女子生徒。海に近い原町区の自宅を父親と逃げ出したが、残った祖父母を助け出そうと戻り、父もろとも津波にのまれた。

生徒の遺体に損傷は少なかった。すぐにも起き上がって何か話し出しそうに見えた。最後の別れでは「怖かったろうな」と声をかけた。業者が死に化粧をし、居合わせた教師や同級生らと見送った。

「30年以上の教師生活で、今回の震災ほどつらく、不条理な経験はなかった」と二本松。

学校へ次々に遺体が運ばれてくるという非日常が日常化した。感覚がまひした。

二本松はその8月、異動でサテライト先だった相馬高の校長になった。それから2年がたった。この3月、定年で退職する。

2011年4月、安否確認サイトを立ち上げた原田泰世は相馬高校3年に進級した。妹の純加は原町高校2年になった。

5月にサテライトが始まると、相馬高が原町高の受け入れ校になり、いっしょに相馬高へ通った。

原町高から、300人近い生徒が相馬高にやってきた。旧相馬女子高校に入った相馬農業高校と合わせて生徒数は約1100人。通常の相馬高の生徒総数より約500人多い。

相馬高は、習熟度別で教室を分ける従来のやり方をやめ、クラスで使う教室だけにとどめた。それでも教室が足りなくなった。

このため原町高はクラス単位での教室の割り当てが難しく、学年別に文系と理系で分けた。純加の教室は最大で63人にもなった。

純加の教室に窓はなく、会議用の長机に3人がけて座った。教科書を広げにくいほどの狭さだった。

黒板の代わりにホワイトボードが使われた。だが、後ろの席からだと板書が読めなかった。原町高の生徒が相馬高の教師に勉強をみてもらうこともあった。そして、その逆も。

エアコンがなく、夏に扇風機を6台入れた。それでも暑さのあまり、純加は頭がぼーとした。

相馬高のクラスと原町高のクラスが、教室調整の失敗で重なってしまうこともあった。

「それでもみんな文句もいわずに過ごしていました」と泰世。

震災直後、純加は泰世らと岩手県一関市に避難した。そのとき現地の高校にいったん転入している。しかし雰囲気になじめず、サテライトが始まってすぐに戻ってきた。

「帰ってみたら、先生はビリビリしているし、クラスの雰囲気も重かった。それでも、福島に戻れたというだけで気が休まりました」

家族が亡くなったり、家が津波で流されたりした友だちも多かった。そういう友だちと話すときは、相手の状況をさぐりながら、気を使って話さなければならなかった。

震災後、原町高から相馬高に転校した生徒もいた。そこにサテライトで原町高の生徒が大勢やってきた。違う制服姿で再び顔を合わせる気まづさがあった。

学年主任の松村茂郎は「双方の気持ちを考えると、とても切ない気持ちになりました」と振り返る。

泰世と純加は「それでも、学校がきれいになったなどという子はいませんでした」という。「学校は大切な生活の柱でした」

第16章 支援者の宿がない

2011年4月の相馬高校の再開後、東大教授の松井彰彦は相馬をたびたび訪れるようになった。相馬高生の東大での研修を引き受けたのがきっかけだった。

東大医科研特任教授の上（かみ）昌広、予備校講師の藤井健志もひんぱんにやってきた。だが問題は宿だった。震災復旧の作業員で、市内の宿泊施設はつねに満員なのだ。

その問題を解決したのが宮澤保夫（みやざわやすお）（63）だった。宮澤は不登校児の通う学校や幼稚園などから北海道の星槎（せいさ）大学まで、教育事業を全国規模で展開する星槎グループ会長だ。

以前からつきあいがあった上（かみ）から連絡を受け、宮澤が相馬市に入ったのは4月12日。バングラデシュの支援活動を終え、帰国直後だった。

震災の様子はバングラデシュのテレビで見た。それだけでも大きな被害だとわかっていた。何かやらなければならない。しかし、何をすればいいのか。

福島に入ると、避難所や学校、医療機関など、あらゆるところに顔を出した。「何か困っていませんか、物資は足りていますか」。声をかけ、対話を重ねた。

スタッフが避難したため人手が不足している病院。健康状態が悪化しがちな避難所。さまざまな場所を見て回るうちに、継続的な支援の必要があることを痛感した。

「国会議員なんかもよく来たが、情報収集して帰るだけ。そのときだけのことです。地元はその対応に振り回されている」

上（かみ）は浜通りで、放射線説明会や健康診断に取り組んでいた。相馬にも医療関係者が次々に入ってきた。

それに加え、相馬高には松井のゼミの東大生や、藤井の同僚の予備校講師、そして上（かみ）の知り合いの競輪選手らが支援に訪れた。

こうした人たちの宿がない。

「これでは、被災地の人たちに、逆に世話になってしまう」。宮澤はすぐ、宿泊と食事の拠点づくりに取りかかった。

見つけたのが、相馬市役所に近い雑居ビルの3階だった。市内の病院が、南相馬市の病院から避難した看護師の住居にしていた。看護師が別の病院に移り、全てを借りられた。

1、2階は店舗で、3階が居住階だ。共同トイレだが、部屋は七つ、風呂は二つ。日当たりもよかった。

4月28日から、ボランティアに無償で宿と朝食の提供が始まった。宿はいつしか、「星槎寮」と呼ばれるようになった。

第17章 怖い顔、だめだよ

星槎（せいさ）グループ会長の宮澤保夫が相馬市につくった宿泊施設「星槎寮」には、さまざまな人が出入りするようになった。

松井彰彦ら東大の先生たちは常連だ。松井ゼミの学生が来る。予備校講師の藤井健志。一般のボランティア。医師、カウンセラーも泊まる。これまで、延べ宿泊人数は2千人に達した。

相馬高校の理科教師だった高村泰広（たかむらやすひろ）（39）も、よく出入りした一人だ。市内に住むので宿泊はしないが、毎日のように顔を出した。

震災直後、相馬高校の本校舎は避難所にはならなかった。高村は、生徒の安否確認のため、市内各所の避難所を徒歩や自転車で回った。配膳の手伝いもした。ほかの教師たちも同じことをしていた。

高村は東京研修を引率した。その縁で松井や藤井らと交流が始まる。

いつしか高村は、相馬高校だけでなく、寮を拠点に相馬市全体を対象に動き始めていた。

相馬高校の同僚だけでなく、知人や教え子を星槎寮に連れていった。寮に宿泊している人たちから支援の中身を聞き、議論し、深夜まで語る。寮には相馬市の職員や商店主も顔を出すようになった。

ときには誰かが酒を持ち込み、みんなで酌み交わす。「支援物資を行き渡らせるにはどうすればいいのか」などを話し合った。

議論が実践に移ったこともある。2011年5月下旬、東大医科研のメンバーが、飯館村で住民対象の健康診断を行った。寮でこの話が出た。翌日、高村ら相馬高校の教師3人と星槎グループの教職員が参加し、受付や注射器のラベル貼りなどを手伝った。

相馬高校で始まった外部交流が、学校以外で展開されるようになったのだ。

一方で、星槎グループの活動は続いた。津波被害を受けた相馬市沿岸部の小中学生を対象としたカウンセリングだ。

星槎の職員と相馬市の職員がチームを組み、カウンセラーを小規模学校や仮設住宅に派遣する。

きっかけは、宮澤が避難所で、女子児童から声をかけられたことだった。

「おじさん、ここでは怖い顔をしちゃだめなんだよ。明るい顔をしないとイケないんだよ」

明るさをつくるために、子どもが神経を張り詰めている。宮澤には、そう感じられたからだ。

第18章 ひょっとしたら東大

2013年3月10日、東京大学の合格発表があった。東京の本郷キャンパス。受験番号が記された掲示板の前で、受験票を手に満面の笑みの受験生がいた。

稲村建（いなむらたける）（18）。相馬高校の松村茂郎が受け持つ6組の生徒だ。理科1類への現役合格。相馬高からは12年ぶりの東大合格者だった。

数学と理科が好きで、もともとは東北大の理学部に行こうと思っていた。

1年生のとき、科学好きの高校生を招く東北大のプログラムに参加した。いっしょに参加した他校の1年生が「東大を目指してるんだ」といったのに驚いた。

「東大なんて都会の人が行く大学だと思っていましたから。僕には遠い存在だった」

1年生の最後、2011年3月に大震災と原発事故が起きた。稲村は相馬市内の自宅から約1カ月間、千葉県我孫子市の親戚宅に避難した。

勉強に手がつかない日々が続く。受験への不安、あせり、自信のゆらぎ……。それが、松村が企画した4月の東京研修への参加で、大きく変わった。

その後、東大教授の松井彰彦や予備校講師の藤井健志らが定期的に相馬高を訪れるようになった。松井のゼミの東大生とも話をした。

「ひょっとしたら東大に行けるかも」と思うようになった。そして2年の後半には「ぜひ行きたい」に高まった。担任の松村は、松井らの外部支援が実るかたちで、1人ぐらい東大合格者が出ないものかと、ひそかに願っていた。

東大がすべてというわけではない。だが、原発事故後の厳しい環境下でも、高い目標を掲げて努力し、達成した生徒が出てくれば、その影響は大きいはずだ――。

稲村は周囲の期待が日増しに大きくなるのがわかった。しかしそれほど負担には感じなかった。

「震災がなければ、松井先生や藤井先生とのつながりなんてなかった。東大も目指さなかった。とても不思議な感じです」

合格発表から3日後の13日、稲村は相馬高で1、2年生を前に講演した。「相馬高校出身の東大生を増やしたい」と、稲村自身が提案して実現した講演だった。

「相馬高は外部との交流が盛んだ。人に会おう。クラスみんなで受験を乗り越えよう。目標は、ちょっと高く持とう」

第19章 色紙に感謝の言葉

双葉高校から相馬高校に転入した蜂須賀康太は2012年4月、3年生になったとき、6組のホームルーム長に選ばれた。

だれがふさわしいか。クラス全員が投票用紙に名前を書いた。蜂須賀の名前が一番多かった。

「せっかく相馬高校に転入したんだし、何か役をやりたいと思っていました。本当にうれしかった」

それから1年が過ぎた。

3月1日、卒業式が行われた。教室でのホームルームに戻り、担任の松村茂郎が、一人ひとりに卒業証書を手渡した。

渡し終わった松村はいった。

「君たちは、外部の多くの人たちと交流するという通常できない体験をした。今後も、下の学年を指導するために、相馬高校を訪ねてきてほしい。それが願いだ」

すると突然、ルーム長の蜂須賀が「みんな並んで！」と号令をかけた。全員が「先生、3年間ありがとうございました」と松村に頭を下げる。それから肩を組み、「旅立ちの日に」を歌った。蜂須賀が式典後に呼びかけて決めたことだった。

6組の生徒は、来賓で訪れた予備校講師の藤井健志に色紙を渡した。

「東日本大震災というつらい経験が縁の始まりでした。震災は悲しいできごととしてだけではなく、すばらしい経験と出会いをもたらしてくれました」と感謝の言葉があった。

蜂須賀も色紙に、「勉強面から生活面の何から何までお世話になりました！」と書き込んでいた。

蜂須賀は4月から、群馬大学の教育学部に進学する。夢は教師だ。

避難先に「元氣か。またみんなで集まろうな」とわざわざ電話してきてくれた双葉高校の担任。「困ったことはないか」と気にかけてくれた担任の松村。生徒の精神的な支えが教師なんだ。自分もそんな存在になりたいと、強く思う。

3月9日、自宅のあった浪江町請戸地区に、震災後初めて行った。

「進路が決まるまでは行かない」と決めていた。何もない自宅跡を見たら、落ち込んで勉強が手に着かなくなるのではないかと怖かった。

請戸地区に入ったものの、どこがどこかわからない。道の面影をたどって何とか自宅跡に着いた。

土台と浴槽しか残っていなかった。周囲には何もなく、枯れた草原のようになっていた。

自分は次のステップを踏み出す。もうここには来ないだろう。自宅跡には30分しかいなかった。

相馬高校の松村茂郎は、赴任して満10年になる。

2010年4月の新入生の受け持ちで、初めて学年主任になった。何か特徴を出したかった。このときから、毎月1回の学年通信発行を欠かさない自分に誓った。3年間で36回発行し、約束は守った。

タイトルは「SHU・HA・RI」。「守・破・離」のことだ。

武道の精神を表す。剣道をやっていた松村が好きな文句だ。初めは師の教えを忠実に守る「守」。その後は師の教えの枠を壊して自分で工夫を加える「破」。最後は、何事にもとらわれず自由な境地で師を越えようという「離」。

松村は、震災後の2011年4月18日号で、「私たちは大震災でハンディを背負ったのだろうか？ 答えはNOだ」と書いた。

その後の東大教授・松井彰彦や予備校講師・藤井健志、星槎グループとのつながりで、その思いを形にしたかった。

大震災、原発事故という厳しい経験を乗り越え、他者との交流の経験を土台に、生徒たちは自分の道を歩み始めた。「SHU・HA・RI」が、立派にできているじゃないか。

松村の自宅がある浪江町川添地区は、4月に避難区域が再編される。立ち入りはできるようになるが、相変わらず住むことはできない。

家族は4月から、郡山市に家を借りて久しぶりに合流することになった。妻の実家の間借りやアパート暮らしは、やっと解消される。

だが生徒と違って、自分はうまく道を歩めていないと思う。

「区域再編しても住めないのでは、自分たち家族がこの先どこに定住して、どういう生活ができるのかが想像できない」

生まれ故郷の浪江町津島地区は、4月から帰還困難区域になる。この2月、生家周辺を訪れてみた。

福島市から国道114号を車で向かう。津島地区に入ると、線量計のアラームが急に鳴り始めた。

立ち入り禁止区域の手前が生家周辺だ。毎時7マイクロシーベルトの場所もあった。高い放射線量に、もう来ることはないと思った。

「自分たちの家族は生活の見通しが立たない。でも、自分の担当した学年は震災を乗り越えてくれた。相馬高校も外部交流でいい方向に進んでいます」

プロメテウスの罠〔26〕 震災乗り越えた生徒たち

著 者 朝日新聞（岩堀滋）

発行所 朝日新聞社

〒104-8011 東京都中央区築地5-3-2

<http://www.asahi.com/>

発売所 朝日新聞社デジタル本部

〒104-8011 東京都中央区築地5-3-2

<http://www.asahi.com>

2013年4月12日 WEB新書版発行

2013年11月30日 EPUB版発行

©2013 The Asahi Shimbun Company

All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.

ISBN 978-4-86526-052-6

〈ご注意〉本コンテンツは、購入者個人の閲覧目的のためのものです。私的範囲を越える利用・譲渡などは禁止します。

〈おことわり〉本コンテンツは2013年4月12日に刊行されたWEB新書版を底本としました。EPUB版の刊行にともない、体裁や表記を直した場合があります。企業、組織などの名称、人物の役職、肩書等はいずれも記事初出当時のものです。